

全学フォーラム：奈良女子大学における教養教育の再構築のために

第1回の報告

奈良女子大学における教養教育の再構築に向けた全学フォーラムの第1回目が5月17日に開催されました。今岡春樹学長からのご挨拶に続いて、生活環境学部の植野洋志教授と教育システム研究開発センター長・文学部の西村拓生教授から話題提供がありました。話題提供を受けて、小路田泰直副学長の司会で、附属中等教育学校の先生方を含めた35名の参加者が活発な議論を交わしました。西村センター長から提案された教養教育の改革試案についてはニューズレター28号をご参照いただくこととして、本号では、植野先生のお話と、それに続く議論を中心にお伝えします。

植野洋志先生

■ 教養教育に教科書はいらない

教養教育とは、学問において何が問題なのか、どういうことがオモロイのか、何がこれから起きるかを、教科書なしで追求するための基礎づくりをする場ではないかと思っています。1回生の時期は、高校までの箱型の教育から目的意識を持った教育への転換期ですから、覚える形から考える形に学びを変えていかなければなりません。教科書に書いてあることが正しい、という形での学問への入り方を変えなければならないと思います。

■ 理系はおもしろい

本学に赴任した当初、「理科離れ」に苦慮する当時の学部長に「幼稚園から理科大好き人間を育てよう」と提案しました。その後、附属校園が大学全体の附属の改組された際に、中等教育学校の初代校長に選んでいただきました。そこで私が真っ先にしたことは、保護者の方に理系のよさを売り込むことでした。そうすると、子どもに「理系はおもしろい、理系に進め」と言ってくれるのです。たとえ理系に進まなくても、理系の概念を身につけた文系の人は強い。そういうところで文理が両立していく環境ができていくと思います。

■ 垣根を取り払う教育と研究

入学してくる学生には、窓口として理学部、文学部、生活環境学部という区切りは必要かもしれません。しかし、教育の場を通じて学問することを考えると、学問の間に壁があっては困ると思います。壁を作れば作るほど箱型人間が出てくるからです。壁を取っ払わないと、人間は自由な発想で動けないのではないのでしょうか。例えば、理系の人間が、生物は好きだが化学は大嫌いと言うのは、おかしいのではないかと。化学反応が身体の中で起きているのだから、化学的な目で生物を見ないと意味が

ない。そういう意味でも、いろいろなところで垣根を取っ払っていく教育と研究が望ましい。学生にとって大学に入った時の印象は強いですから、教養教育で学問に新奇性を見いだせれば、やる気をもって4年間過ごしてくれるのではないかと思います。

議論

■ 興味を持たせる教養教育を

単なる幅広い知識はいらないと思いますが、幅広い興味はもってもらいたい。学生たちが幅広い興味をもてないのは、教員側が幅広い興味をもっていないからではないかとも思うのです。私たち教員も、他学部の先生の話の聴きにいくことはほとんどないですよね。学生たちには、世の中の不思議なことやわからないことについて、どうなっているんだろうと興味を持たせる仕組みが必要ではないかと思っています。不思議なことを「知識」で片づけるのではない教養教育のあり方をご検討いただきたいと思います。(理学部・渡邊利雄先生)

全学フォーラム第2回のお知らせ

奈良女子大学における
教養教育の再構築のために

第2回 奈良女子大学生の学びの現状から

日時：2013年6月24日（月）

16時30分～18時30分

場所：A棟 理学部会議室

話題提供：理学部 棚瀬知明先生

生活環境学部 久保博子先生

教育システム研究開発センター・

文学部 保田卓先生

■ 他学部の専門科目を教養科目として学ぶ

他学部の専門科目を勉強しに行くという教養教育のあり方を考えています。たとえば文学部に来たら物理学を学ぼう、と言うように。自分の学問の基礎演習を取るのではなく、他学部の基礎演習を何か取るという形でやると、教える側も、関心がないかもしれない学生に教えないといけないので鍛えられると思います。(文学部・麻生武先生)

■ 「教養」は問い直し続けなければならない

教養とは、絶えずそれを問い続けることにこそ意味がある概念だと思います。問い直し続けることが、この概念に活力なり生命力なりを与える根拠となるからです。教養論はたくさんあるけれど専門論というのはありませんね。だから、かつてセンターのインタビューを受けた時に、専門と教養は並列や上下ではなく別の次元の概念だと答えたわけです。また、そもそも教養と教養教育はイコールではありません。教養は教育をはるかにみ出してしまうものです。成績が優秀であることと教養があることにはズレがある。このズレの感覚を埋めるのではなく、持ち続けることが正しいあり方かなと思います。(文学部・三野博司先生)

西村——おっしゃる通りで、そのような「教養」の問い直しを、具体的に新しい教養教育をつくる実践を通して遂行して行きたいと考えています。

■ アウトプット・スキルとしての教養を

教養教育という場合、何を教えるかだけではなく、情報発信のスキルも大事ではないかと考えています。私がドクターの時の指導教員が、現在ハーバード大学で一般教養の主任をしています。彼は、アウトプットの仕方を丁寧に教えていく。アウトプットのスキルを身につけると、専門に進んだ時に、自分の専門について人に語りたくなるのだそうです。自分がやっていることを伝えるスキルをもっているということが、専門教育において大きなモチベーションになると話してくれました。(生活環境学部・鈴木則子先生)

■ 学生の学びの実態を捉えるべき

現在の教養教育の効果を確かめられないまま議論しているのではないのでしょうか。私たちはもう少し学生を信頼してもいいと思うのです。例えば2回生に、1回生の授業

で何を覚えているのか、なぜ覚えているかを丁寧に聞き取れば、どんな授業にどんな効果があるかがわかるでしょう。何ができなかったかではなく、何ができているかをちゃんと聞いて対策を立てる方がいいのではないかと思います。ただ、効果を見ると言っても、すべての授業がeラーニングになったら学生もしんどいと思います。間引きの仕方も工夫していくべきではないでしょうか。(文学部・小川伸彦先生)

西村——学生がどのように学んでいるのかは、たしかに確認すべき課題だと考えています。次回のフォーラムでは、そこに焦点化して議論したいと思っています。ただ、データを取っても、それを解釈するには、たとえば「何を覚えるべきなのか」といった価値が前提となるので、やはり前提として、教養とは何かを議論せざるをえないと考えます。

小路田——教養をめぐる議論では、意見が一つになることではないと思いますが、相当に議論した上で、本学としては「教養教育というものを充実させていく方向はこうだ」と打ち出していきたいと思っています。常識を超えたところで面白いことができれば、奈良女子大学が飛躍するチャンスになります。今後ともご協力をいただいて、ご意見を西村先生のところにぶつけてほしいと思います。また、今日は附属の先生方も来ておられます。幼稚園から大学院までである本学として、大学教育に限らず、どういう年齢の人に、どういう教育をするのがいいのか、全体として考えていきたいと思いますので、附属の先生方からも今後ご意見をいただきたいと思います。

参加者からの感想

文学部・西村さとみ先生

しばしば教養主義批判の文脈で語られ、また大学教育と親和的でないものと捉えられがちな教養。当日の議論からは、こうした認識を前提に大学教育のなかに教養を位置づけることの難しさもうかがわれた。しかし、何ゆえ教養論とその批判が繰り返されるのか、そこには私たちが看過できない問題が潜んでいるはずである。それらを省みることも含め、今あえて〈教養とは何か〉を問うことの重要性を感じさせてくれたフォーラムであった。

附属中等教育学校・北尾悟先生

附属中等からの参加者としては、最後に司会の小路田先生が「附属を持っていることの意味」を教養教育とからめて指摘していただいたことがうれしかった。ただフォーラムを通じて強く感じたのは、「議論の出発点に立つということがこれほどまでに難しいか」ということである。改革の議論の土台は「問題意識」もしくは「危機感」の一定の共有にあると思うが、そのどちらも今回の議論から感じることは正直できなかった。次回は「大学生の現状についての議論」だという。ぜひ具体的に地に足のついた議論を行いたいと思う。